Keisen
Let your light shine
恵泉女学園大学　チャペルガイド

恵泉女学園とは
「恵みの泉である女子の学びの園」である。
誰も泉をつくることはできない、
それは創造主からの賜物である。
私の学校もその通りである。
いのちの源から湧きあがる
恵みの賜物であらせたい。

（河井道著『マイランターン』より）

創立者
河井　道（1877-1953）

河井道は北海道のスミス女学校に学び、当時札幌農学校で教鞭をとっていた新渡戸稲造に出会い、夫妻の勧めで米国のブリンマー大学に留学しました。そこでの経験は、彼女の眼を新しい世界へと大きく開かせました。

帰国後女子英学塾（現在の津田塾大学）で教鞭をとるかたわら、日本ＹＷＣＡの創設に加わり、生涯の仕事として女性の社会教育事業に携わることになりました。のちに日本人最初の総幹事として責任を担いつつも、「私の学校」を創りたいとの夢が次第に心の大半を占めるようになります。

恵泉女学園の創立は1929年、世界中が極度に不安定な状況にあったときでした。このようなときに一人の日本人の女性が、キリスト教を基盤とする学園発足に踏み切ったという事実は、注目すべきことです。河井道は時代の女子教育に抗して、人の眼には見えない来るべきまことの平和の世界を創りだす、目覚めた女性を育てようとしたのです。この建学の精神を受けついで、恵泉女学園は「聖書・国際・園芸」を教育の三つの礎とし、正課に取り入れてきました。

○聖書…キリスト教信仰に基づき、自己を尊重するとともに、分け隔てなく他者を尊重すること。
○国際…世界に心を開き、理解することで、様々な違いを乗り越えて、他者と共に生きる女性を育む。
○園芸…自然を慈しみ、いのちを尊ぶ心を養う。

今なおその心は引き継がれ、学生の一人ひとりの心が、恵泉での歩みの中で様々な出会いと学びを通して養われ、豊かに成長しています。
この冊子を通し、ここで展開されている恵泉の心を感じていただければ幸いです。

「汝の光を輝かせ」(Let your light shine)

「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」

（新共同訳 マタイによる福音書5:16）

この言葉は河井道の愛誦聖句のひとつです。

道はアメリカより帰国後、日本の女性の地位の低さを憂いました。聖書のメッセージを通して、誰もが神に愛されている存在であり、一人ひとりにその人ならではの賜物が与えられていることに気付いてほしい。そして、ありのままの自分を受け入れ、その賜物を生かして歩む人となるようにと伝え続けました。

その伝えられた心は、第1回卒業式から行われている「学燈ゆずり」に表されています。卒業生代表が在校生代表にランターンを手渡し、そこから分かたれたろうそくの光を一人ひとりが携えて、新しい道へと歩みだしていきます。

チャペルアワー(礼拝)

月曜日～金曜日(木曜日を除く) 10時30分～10時55分

一人ひとりの内なる光を輝かせる実践の時として、恵泉女学園創立以来、大切に守られています。

この時間は学園の営みの中心であり、根源です。だからこそ授業時間とは重ねず、誰もが参加できるようになっています。

カリヨン塔から響く鐘の音に導かれ、チャペル内では、オルガンの暖かな音色に包まれて、慌ただしい日常から離れ、心を静めます。

メッセージ・感話

チャペルアワーは発表・報告の場ではありません。チャペルアワーに集う一人ひとりが共に神に心を向け、担当される方の言葉に耳を傾け、自分の心の声を聴く時です。恵泉女学園創立当初より、信仰の有無にかかわらず、多くの教職員・学生が担当し、それぞれの体験・経験を聖書の言葉に照らし合わせながら、自分自身に与えられた恵みを受け止め直し、語る機会を与えられています。

心を込めて準備された言葉によって、語る者の喜びや痛み、苦しみが分かち合われ、聴く者の心に響き、聴く者の目から涙があふれることも数少なくありません。分かち合うことで喜びは倍になり、悲しみを共に担う仲間が与えられるのです。

『恵みの泉』

年度末には参加できなかった人にもその内容を届け、卒業していく学生たちには、卒業後の導きとなるように、また、新入生たちにはチャペルアワーへの出席の動機づけと恵泉の心を知る道しるべの一つになるようにとの思いを込めて、1年間のチャペルアワーで語られたメッセージ・感話をまとめた『恵みの泉』を発行しています。

キリスト教センターは正門から入ってキャンパスの一番奥にあるチャペルの階下に位置します。最初は緊張した面持ちで足を踏み入れた学生たちも、いつの間にか居心地のよい場所としてここで過ごしています。

ここでは、キリスト教教育主任、大学オルガニスト、センタースタッフの3名が日々の働きの中で、学生たちの歩みを見守りつつ、あたたかい空間を育めるよう励んでいます。また、「いつでも行けば誰かがいる」という環境は安心感を生みだしているように思います。

「自分がキライ」「自信がない」「変わりたい」

多くの学生たちが口にする言葉です。
さまざまな環境の中で育まれてきた学生たち。
自分と向き合う時間の少なさ、他人との比較の中での暮らし。
それらが「ありのままの私」を否定しているのでしょう。
ここでは、多くの出会いの中で自分が自分を受け入れることから始まるのだ、と教えてくれます。
そして、その思いが自然に広がり、互いに受け入れ合う姿に喜びを感じています。

キリスト教センターの日々

仲間との出会い

様々な活動を通して、喜びを共にし、
悩みや痛みを分かち合う友に出会い、
周りの仲間に寄り添っている友と出会い、
優しさが育まれ、自分は一人ではないことを
知ります。そして、真の仲間とは日々の
交わりの中で時間をかけて
育まれることに気づきます。

自分との出会い

多くの痛みを抱え、
自分と向き合うことを避けていた日々。
慌ただしい日々の中、チャペルアワーや
様々な活動、プログラムの中で
自分の歩みを振り返る機会を与えられ、
自分自身を受け入れることの大切さ、
新たな自分を見出します。

自然との出会い

キリスト教センターの大きな窓から
見える四季折々の
人間が創り出すことのできない
自然の表情に、誰もがその美しさに
心が癒されることでしょう。
のびのびと歌う鳥たちの声にも
やさしさを与えられています。

聖歌隊

- 仲間の声に耳を澄まし、聴き合い、心を合わせて賛美しています。
- ♪あなたとあなたの
  心の中の分かち合う優しさを
  共に祈りあえる心強さを
  この恵みの泉のなかで♪
  “Grace of God”は私たちが大切に賛美している歌の一つです。

キリスト教センターの様々な活動を通して

天使隊

- 教職員による聖歌隊です。
- 個性豊かなメンバーが集い、一人ひとりの賜物が賛美を通して生かされています。

オルガンレッスン

- オルガンの豊かな音色に包まれ、幸せなひと時。
- 礼拝の奏楽を担当したことで、オルガンが共に歌い、賛美していることに気づきました。

ハンドベルクワイア

- 天使のハーモニーのように、そっとあなたの心に恵泉の音色をお届けします。
- 一人ひとりがかけがえのない存在であることを日々実感しています。

学生宗教部シャロン

- ここはありのままの私でいられる居場所です。
- たくさんの企画を共に考え、準備する中でお互いを受け入れあうようになっています。

タイ国際ワークキャンプ

- 日本での準備、10日間のタイでの出会いと体験、すべてが私を育ててくれます。
- タイワークへの参加をきっかけに、次へのステップへ歩み出せました。

フラワーエンジェル

- 小さな花瓶にガーデンのお花を挿して、キャンパスのあらゆるところに飾っています。
- 目にした人々の心を和らげ、優しさのあふれるキャンパスに!

＜これまで語られた感話から＞

在学時、卒業を間近に控えた頃、卒業生として卒業後のそれぞれの時期に語られた３名の感話をご紹介いたします。一人ひとりの恵泉での歩みの中で与えられた恵みが語られています。

この他にも、日々の礼拝で多くの学生によって感話が語られていますので、『恵みの泉』も合わせてお読みください。

過去から見えること

三宅彩乃さん（人間環境学科3年）

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

（ローマの信徒への手紙12章9～15節）

突然ですが、皆さんはご自身がお好きですか。自分といっても性格や、生き方、これまで歩んできた人生など「自分」を定義するものはたくさんありますが、全てをひっくるめて好きだと言えることはできますか。今、私がこの質問をされたら、私は自信たっぷりにこう答えると思います。「私は自分が好きです。」これは決して自分に陶酔しているという意味ではありません。これまで歩んできた自分の人生を振り返ってみてすべてをひっくるめて、自信を持って好きだなと言えます。理由は簡単です。私は高校生の頃、死を考えるほど自分のことが大嫌いだったからです。

高校1年生の夏、私は些細なことがきっかけでそれまでとても仲の良かった友人と喧嘩をしました。周りの友人たちの支えもあり、私はその子に謝りにいき、一瞬解決したように思われました。その後部活に行くと部活の仲間が私に教えてくれました。悪口、書いてあるよ。その子が見せてくれたのは携帯の画面でした。そこには本当にたくさんの陰口から始まり、性格のこと、家族のこと、学校での私のことなどその子しか知らないようなことも全て記されていました。幸いにも夏休みに入る直前だったので、とくに意識することなく部活に没頭していたのですが、新学期、私は高校に行くことが困難になりました。

何をするのもやる気が起きない、過剰な睡眠欲、気が付いたら溜息ばかりをつく、激しい肩こり、それに伴う吐き気を催すほどの頭痛、電車に乗ると必ず腹痛が起こり、途中下車をして遅刻ばかり。そんなことを繰り返していました。全て、ストレスです。見かねた母が心療内科を探してくれ、通院するようになりました。全く眠れない日々が続くので睡眠導入剤をもらうのですが、それさえも効かず、睡眠薬を投薬されました。私はかつて、うつ病患者でした。

友人がつづっていた沢山の私の悪口が、私にとってはとても衝撃的で、気づかぬうちに脳には強いストレスがかかっていたようです。だんだん普通のことが出来なくなっていきました。普通に眠ることも、朝を迎えることも、食事をとることも、勉強することも、時には自分の心臓を止めたくなることもありました。自分なんていなければいい、私がこの世から消えても誰も悲しみはしない。そんなことばかり思うようになり、やりたくても普通の生活が送れない自分にもがき、苦しみ、ひたすら自己否定をし続け、完全に私は、自分のことが嫌いになりました。そして自意識過剰な程周りの人が気になり、電車に乗ることも、外に出ることもできなくなっていました。人に対する恐怖感が自分の中から消えることはありませんでした。うつ病は一般に心の風邪などと言われますが、実は心が病んでいるのではなく、何らかの強いストレスによって衝撃を受けてしまった脳の機能障害であり、神経伝達物質が通常の人より正常に伝わらなくなるために患います。当時の私に生きる希望などありませんでした。

私はそれまで、山登り型の生き方をしていました。人間には二通りの生き方があるといいます。一つは山登りのように目標を掲げ、それに向かって努力し乗り越えるような生き方をする山登り型、もう一つは川下りのように流れに乗って目的地に到着する川下り型です。私はずっと、山登り型の生き方で、～しなければならない、という義務感の元に生きていました。今思えば私はうつ病になるずっと前からそのような生き方をしていたような気がします。うつ病の患者に、頑張れ、という言葉が厳禁なのですが、それは頑張らなければならない、と感じてしまうからなのです。

何もしない日々が続いていたある日、私はピタッと、頑張ってみることをやめてみようと思いました。私はきっと、生きることに対しても、生きなければならない、と

いう義務感を抱いていたのではないかと思います。

頑張るのをやめてからしばらくすると、だんだん飽きてくるのがわかりました。するとだんだんと本が読みたくなったり、音楽が聴きたくなったり、〜したいという感情が湧き出てきます。そのように感じたらとりあえずやってみる。するとだんだん、当たり前にこなしていた生活が少しずつ出来るようになっていきました。そして素直に、それまで通っていた中高一貫の女子校を辞めたいと思い、通信制高校へと転校しました。これがのちに私の転機となりました。だんだんと、自分を受け入れていくことに慣れていったのです。

今回の聖書箇所はサブタイトルとして、キリスト教的生活の規範とありますが、私はこれは、人に対する愛に偽りがあってはいけないというのではなく、自分に対する愛から始まるのではないかと思います。かつての私のように、自分が自分のことを好きでなければ、誰も自分のことを好きになってはくれないし、いくら家族が愛してくれていると知ってもそれを自分で認めることができなければ、その愛を受け取るどころか、跳ね返してしまいます。冒頭の質問でご自身のことを好きだなと少しでも感じた方はそれだけでとても幸せなことだと私は思います。なぜなら少なくとも自分に対する自信と愛があるからです。

私にとって自分自身に悩み苦しんだ期間は耐え忍んだ苦難でした。そんな私がなぜ、ここまで自分のことが好きになれたのか。それは周りの人に対する感謝と、素直に自分を認めることが出来るようになったからだと思います。どんな時も温かく見守ってくれた家族や、見捨てずに心配してくれ支えてくれた友人たちがたくさんいて、その人たちのおかげで今の私があります。当時の私はすべてを跳ね返していて心の貧しい人間でした。ですがその時の経験があるからこそ、私は生きていくうえで本当に大切なものを見出し、自分という価値を見つけることができたと思います。

どんな時も仲間というものは素敵なものだなと感じます。中高生の頃は学校を辞めるまで、演劇部に所属し、泣いたり笑ったりたくさんの青春がありました。最近ではタイ国際ワークキャンプに参加し、学年や学科の垣根を越えて、たくさんの友人が出来ました。タイでは自分の中で本当にたくさんのことがあり、今ここでは割愛しますが、大学生になってから純粋に、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣いたのはこの時が初めてでした。私が自分自身を受け入れ、感謝することの大切さに気付いたのはうつ病になったとき、そして、人の温かさを正しく理解したのはタイワークで過ごした10日間でした。参加をためらっていた時に声をかけてくれたのもタイワークのメンバーでした。人との出会いというものはどこでどう自分を変えるかわからないし、人との出会いに無駄なことは一切ないと断言できます。それはやはり聖書にもあるように、人間一人ひとりには尊敬できる一面が必ずあるからです。尊敬の念を持ち、善には親しみを結び、誠実に生きれば、その分絶対に同じように自分にも返ってきます。自分が少しでも変われば、おのずと自分の世界も変わって見えてくるのです。

学校をやめたとき、私はもう、喧嘩をしたことなど忘れかけていました。むしろ、その子と喧嘩したことで、私は大切なことに気づけたので、ありがとうの気持ちと、どこかで笑顔で過ごしていたらいいなぁくらいの気持ちでした。運命の悪戯というものは存在するものです。通院も投薬もしなくてよくなった頃、私は偶然にもその子とばったり再会したのです。初めは私が見かけただけだったので声をかけるのを一瞬ためらいましたが、その瞬間、再会したことにすごく縁を感じ、声をかけずにはいられませんでした。高校を去ってから約2年の間、誰一人として街で見かけることなどなかったのに、初めて見つけたのがその子だなんて、やはりどこかで神様は見守ってくれていたのでしょう。そしてその2年間の患難は私にとって必要な時間で、それ以下でもそれ以上でもなく、その子との再会の準備をするのにぴったりの年月だったのだと思います。中高一貫の6年という長い月日の中で少しでも共に喜びあい、共に泣きあった仲間は、目には見えない何かで繋がれていて、私のような者の小さな祈りでもちゃんと届くように、世界は成り立っているんだなぁと感謝の想いでいっぱいになりました。

ですから私は私の辿ってきた道やすべてを含めて今の自分が好きです。道に迷ったり、苦しんだり、人間ですから当たり前です。そんな時は自分を否定せず、まずは受け入れてあげること、そして感謝をすること。答えが見つからなくて途方にくれていても、ふとしたことが一筋の光になるかもしれない。そのためには心の磁石に従って、自分の心を信じて、やりたくなったら、やってみればいい。言いたいことがあるなら、勇気を振り絞って声に出してみればいい。悩む期間というものは決して無駄な時間でなく、少しずつ、そして着実に成長するために必要なだけ与えられた時間なのです。

私の過去から見えるものはすべて、自分にとってプラスなものです。そしてこれからどんな人になりたいかと言われたらこの聖書箇所のように、自分自身に嘘をつかず愛をもって、そして他者のために祈ることが出来る人になりたいです。そして残りの大学生活の中で、たくさんの人と出会い、喜びや悲しみを共有し自身の成長へと繋げていけたらいいなぁと思います。

恵泉での日々を振り返って

荒井祐子さん（人間環境学科4年）

塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。

（マルコによる福音書9章50節）

世界には沢山の出会いがあります。それと同時に多くの別れもあります。私がここ恵泉に入学した年、多くの方が震災で亡くなりました。この出来事によって、今まで以上に他者との関わりのなかで自分がどう生きて行くべきか、また、この社会に自分をどう貢献していき、生きるのかということを考えさせられました。今振り返ると、“自分の出来ることは一生懸命やっていこう”。これが、私の学生生活のテーマであった気がします。恵泉で過ごした4年間を振り返ると、“出会い”と“別れ”が凝縮したものでした。恵泉での学びを深めるうちにどんどん人との出会いも広がり、また自分の世界や価値観も大きく変わっていきました。人との繋がりで新たな活動や人と出会えることは喜びでもあり、楽しみでもありました。しかし、ふと外の世界に目を向けると、毎日多くの方がテロや災害で亡くなっていく現実もそこにはありました。貧困にあえぐ子どもや難民の方のことを知れば、一体私とこの方たちの違いはなんなのだろう、私という存在はなんなのだろう、と深く考えさせられました。この恵泉では自分のことだけを考えるのではなく、他者、それも身近な人だけではなく、遠くの人たちにも思いを馳せ、寄り添う大切さを学びました。

この大学生活の間に私は“死”についても深く考えさせられる出来事が多くありました。つまり“別れ”です。大学生活の前半を人との出会いに恵まれた上昇期とするならば、後半は大きな別れを経験した下降期でした。突然親しい人を失う別れもあれば、じわりじわりと、けれども確実に訪れる別れもあります。祖父との別れは後半でした。しかし、突然訪れる別れを考えたら、全ての人が常に“死”というものを身近に抱えているのかもしれません。人との別れも心の傷も消えることはないのだと思います。喪失感と空虚感を抱えても、私たちは命ある限り日常生活を生きて行かなければなりません。しかし、私にはそのことがとてもしんどかったのです。こんなにしんどいのに、休むことも逃げることもできない、生きていかなければならない。そのことが息が詰まるほど苦しかったのです。しかし、閉じこもってしまった私の心に微かに風穴を開けてくれたのは、ここ恵泉の学びと共に学ぶ仲間や先生たちと過ごす何気のない日々でした。些細なことでも笑い合える友だちの存在は何よりも大きかったです。その中で私は、自分自身を大切にする大切さを学びました。自分だけで抱え込まなくても良いのだということ、時には友人に迷惑をかけてしまってもよいのだということ。しかし、友人に迷惑をかけすぎてしまうと、ただのいい加減で怠けている人になってしまうので、そこも難しいのですが。しかし、自分のできることをまずは一生懸命やる大切さを学ぶことができました。

この恵泉で多くのことを学び、そして自分自身と嫌でも向き合わざるをえない日々を過ごしました。そして多くの課題を抱えて、ここ恵泉を卒業します。正直しんどく、逃げ場を求めてしまう日々ですが、もうダメだと限界を感じるときは不思議と、友達や先生と笑い合ったことを思い出します。そして、祖父が亡くなる数日前に私にふと漏らした「生きていくのは大変だね」という言葉を思い出すのです。その時の暖かで穏やかな気候も思い出し、何かほっとした気持ちになります。逃げ場のない苦しさも感じますが、それでも進まないと、と少し勇気をもらいます。

今日の聖書箇所は、私の望みが込められています。今、私は苦しみの中にいますがその苦しみも受け止めて、聖書箇所にあるように自分自身の内に塩を持つ人でありたいのです。塩とはなんでしょうか。弘前学院聖愛高等学校の宗教主任である石垣雅子さんがこのように述べています。「わたしたちが生活の中で、様々な人とかかわり、色々な事柄と出会っていく。その中で自分を本当に大事にし生きていくとき、私たちは地の塩となれるのではないか」そして「自分自身を生かし、同時に誰か他者を生かすことができたとき、わたしたちは初めて地の塩となれるのです。」とも述べています。塩は料理で例えるのならば、味付けにはなくてはならないものです。しかし、塩としての役割を生かすのは、他の食材と調和したときなのです。今の私はまだ塩になれていません。なぜなら自分のことで精一杯だからです。しかしいつか“塩”それもしょっぱ過ぎないおいしい塩になれるように、その源の海を綺麗なものにしていきたいです。そして、創立者である河井道先生が大切にしていた箇所でもありますが、マタイによる福音書5章16節「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」というように、自分自身にしかない“光”を輝かせられる人でありたいと思います。

最後に、ここ恵泉で過ごした日々、出会えた全ての人やことに後悔はありません。多くのことを学べ、また自分の試練にも気づかせて頂きました。残り僅かな学生生活も一生懸命過ごしていきたいです。ありがとうございました。

他人を認め、自分を認められるこころ

森島有紀さん（2003年度日本文化学科卒業生）

あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。　（マタイによる福音書5章13～16節）

中学から大学まで恵泉で過ごした私の恵泉との出会いは、小学生のときで、今から20年も前のことです。受験の際、制服がないところや自由な校風に惹かれ、恵泉を受けました。今日の聖書の箇所は、確か中学の入学式の日の聖書の箇所でした。初めてこの聖書の箇所を読んだとき、「人間が塩ってどういう意味だろう。」と不思議に思ったことを今でも覚えています。しかしその後先生に伺った、「一人一人が重要でかけがえのないものである」というこの箇所に込められたメッセージこそが、恵泉での10年の生活の基盤であったように思います。

今自分が教育者という立場になって思うことは、恵泉の教育はとてもバランスが良いということです。中高では、「女性として誇りを持ち自立すること」と何度も教えられましたが、「女なのに」や「女のくせに」という考え方を取り除くという安直な考え方ではなく、人として、特に女性という立場を生かしてどのように生きられるか、社会の役に立てるかという教育がなされていました。当時学んだことで、今の私自身に大きく影響していることが二つあります。一つは「Yes、Noをはっきり言える人になりなさい」ということ。もう一つは、「ごめんなさいが言える人になりなさい」ということです。しかし実際に社会に出てみると、たいていの人がYesかMaybeで、なかなかはっきりNoと言える人が少なく、また、自分の間違いや非を認められる人が少ないということに気付きました。Yesと言うことは簡単ですが、Noと言うのはどうでしょうか。相手を傷つけないため、自分が不利な立場にならないため、空気を読んで…というように、曖昧に済ませる人が多いと感じます。しかしそれは、自分の意見や主張に責任を負わないのと同じで、自分の非を認められないのも同様に、自分自身の行動や発言に責任伴っていないように思います。誰かのせいにするのではなく、自分自身に責任を持つこと、その上で他者の意見や行動を受け入れることが必要なのではないでしょうか。

高校を経て、大学時代は充実したものでした。もともと海外で働きたいという気持ちがあり、日本語教授法を主専攻で学びました。大学ではアジアに関連した授業も多く、私自身も長期フィールドスタディーでタイへ行き、それがきっかけで卒業後に5年間、タイで日本語を教える機会を得ました。タイの後インドネシアで2年間日本語を教え、今年の4月に日本に帰国しましたが、これからも日本語教師を続けたいと思い、さらなるスキルアップを目指して今年の4月から大学院へ通っています。私と同じ時期に入学した同級生は、私よりも10歳も年下の人たちでしたが、年齢や時期は自分がやりたいことを諦めるほどの問題ではなく、躊躇はありませんでした。逆に、一度社会に出てから大学院に戻って良かったと思うことの方が多く、色々なことを経験した分、多角的に物事が捉えられて自分の視野も広がったように思います。また、同じような時期に留学したり、大学院に通い始めたり、新しいことに挑む恵泉の友人が多かったことも、後押しの一因となったのかもしれません。今の大学院での勉強は、今まで自分がやってきたことの振り返りとなるよいチャンスでした。大学時代は、その勉強が必要なことだとは分かっていても、実際にそれが何の役に立つのか根本的に理解できていませんでしたが、現在は学んでいることと今までの経験が一直線上で繋がり、より深く理解ができ、それと同時に、大学でも同じことを学んだのに、もっと深く理解しようとせずにもったいなかったと思うようになりました。あの時もっとよく勉強しておけば、学生にもっと上手に日本語を教えられたかもしれないと思うことが多々あります。もしかしたら皆さんの中にも、今の勉強の意味が見出せない人がいるかもしれません。大体の大人は「今の勉強が後で役に立つ。だから勉強しろ。」と言い、昔の私も半信半疑だったのですが、今になってその意味が分かるようになりました。ですから、先人の教えのとおり、私も皆さんに「今の勉強が後で必ず役に立つ」というメッセージを送りたいと思います。

中高で学んだ2つのことに加え、大学ではもう1つ、今の私に大きく影響を及ぼしたことがあります。それは、「自分で考える」ということです。大学の授業では自分で考えることが多く、先生方にヒントを頂きながら、自分自身で熟考する訓練ができました。問題を紐解くには、答えにたどり着くまでのステップが重要です。私が今日本語を教えるときにモットーとしていることも、「考える力を養う」ということです。一度間違えて答えを聞いたことより、自分で考えて間違え、また考えてやっと答えを見つけたことは忘れないという経験は、誰にでもあると思います。間違えながらそれを修正していくことで、考える力も養え、自分自身の弱点も分かります。また、なぜ?と考えること、不思議に思うことは、次の問題へのステップにもなります。ああすれば良かった、こうすれば良かったと思うのは誰しもがあることですが、そこで後悔するの

ではなく、自分自身を省みて次には間違わないようにすれば、それこそが成長の糧になります。海外に出たことも、回り道をして大学院へ進学したことも、私にとっては必要だったことであり、その経験があったからこそ今の自分があるのだと思います。

タイやインドネシアと、大学を出てから計7年海外で働いてきましたが、海外で働くと聞くと、多くの人は楽しそうだと思うと同時に、大変なことも多いのではと考えると思います。私の働いていたタイの学校は国立大学付属の小中高で、基本的に授業はタイ語で行なわれますが、外国語はネイティブ教師がその言語のみを使用して教えていました。学生は小学校1年生から英語を、小学校4年生から日本語か中国語を必修選択で学ぶため外国人教師数も多く、日本人・中国人・アメリカ人・イギリス人・オーストラリア人・南アフリカ人などの教師がいる、国際色豊かな職場でした。時に中国語教師と足りない教室を巡って争ったり、英語教師と日本人はなぜクジラを食べるのかで討論をしたり、日本のどこに侍がいるのかと聞かれたりもしました。文化摩擦とも呼べる衝突もありましたが、○○人というステレオタイプではなく、同僚として、また友人として接していくうちに信頼感も生まれ、相手の考え方や個性を理解し尊重できるようになりました。相手を理解すること、理解しようと心がけることこそが、よい人間関係を構築するカギとなります。そして、違いを認め合うことが重要なのだと思います。一方で、自分の意見や価値観も尊重しなければなりません。自分が良いと思わないこと、好きではないことにはNoという権利が誰にでもあります。特に外国にいると、Maybeという曖昧な表現は文字通りに理解され、Maybe＝Noにはならず、はっきり主張するときには主張しなければ、自分の意見が他者から尊重されることはありません。私も何度もお互いの意見の相違をぶつけ合いましたが、それでも同僚たちとは良い関係を築くことができました。相手の意見を聞く姿勢、それと同時に自分の信念を曲げない姿勢、そして、自分が間違った時に見方を修正できる力こそが重要なのではないでしょうか。

タイの職場には5年間いたので、本当に多くの出会いがあり、その中で多くの学びがありました。中国人の同僚の一人は、学校で日本人教師と多く触れ合ったことで日本に興味を持ち、現在日本の大学院で研究生をしています。そうやってやりたいことを実行できる力を持つ人は、とても素敵だと思います。恵泉でできた友人たちもアクティブな人が多く、新しいことにどんどんチャレンジしています。それぞれが、色々な事に挑戦しながら頑張っているという話をよく耳にすると、私もまた頑張ろうという気持ちになります。同じ時期に同じような時間を過ごした友人は、今でもとても大切な人たちで、お互いに良い刺激や影響を与え合っている関係です。そんな友人を持てたことも、恵泉で10年学んでよかったと思える一因です。

本冊子作成にあたり、自らの賜物を日々生かし歩んでおられる卒業生の深見聡子さん（国際社会文化学科2002年3月卒業）にイラストをお願いいたしました。

深見さんは卒業後、会社員を経て、2008年オリジナルイラストの紙雑貨作家SatoPosca（さとぽすか）として活動を開始されました。

生活に取り入れることのできる身近なハッピー紙雑貨をコンセプトにポストカード、お手紙セット、シールやぽち袋、カレンダーなど、いつもの生活がちょっとだけハッピーになる紙モノを制作。作風から結婚式のウェルカムボードも多く描かれています。

今回のイラストに込められた思いを綴っていただきました。

イラストについて

手を取り合い、ドアを開けて新たな一歩を踏み出した学生たち。そんな学生たちを天使が祝福しています。

「一歩踏み出す」、「心のドアを開ける」という意味合いからこのようなレイアウトをイメージしました。

差し込む光に照らされた若木は学生自身を象徴していて、「成長、ステキな未来、可能性」の意味合いを表現しています。若木と学生たちの間に立つ大きな木は、私達ひとりひとりの軸、根幹となる大きな存在の象徴。全てを見守り、受け入れてくれる大きな存在。裏と表をつなぐ、真ん中にゆるぎなく立つ大木です。

学生たちを歓迎するように咲き乱れる花のモチーフはノバラ、プルメリア、カタバミ。ノバラの花言葉は「痛手からの回復」。プルメリアは「気品、恵まれた人、日だまり、内気な乙女」。カタバミは「輝く心、喜び」が花言葉です。

ひとつ扉を開いて、自分自身を見つける。それは決してひとりでがんばらなきゃいけないことではなく、手を取り合った友人や、見守ってくれる人達やいろんな人や物に助けられて導かれていくものだと思います。だから怖がらず諦めず、畏敬の念を忘れずにのんびりとゆったりと愉快に、自分がもっと自分になっていくのを楽しむことができますようにと、願いを込めました。

感話ページのイラストは「輝ける将来」が花言葉の「月桂樹の花と葉」、「平和と羽ばたき」の象徴「白い鳥」、「泉」を意味する「しずく」をモチーフに「光、生命、泉」を表しています。

恵泉女学園大学
〒206-8586
東京都多摩市南野2-10-1
TEL 042-376-8211（代表）
発行日　2015年6月22日